

私は、幸いにも、満鉄社員でとおし、幾多の難関をきりぬけてきたが、あの悲惨な状況は一生涯頭から離れることはない。

平成二年十一月三日文化の日、勲五等瑞宝章を受章したが福島県で永年引揚者の復婦、永住帰国就職、縁故者探し、等々に一身を捧げているための受章である。

東満彷徨四十日

茨城県 岩間重雄

(一) 昭和二十年八月に入っても、綏陽県の夏は暑かった。私は訓練生三十余人を引率し、国境沿いの山奥で、八月六日から四日間の予定で、幕舎生活をしながら山ぶどう採取をしていたが、予定より早く目標量に達したので、八日夕刻下山した。

偶然と言え、全満州が大パニックになった。ソ連軍侵攻直前に、よくも間に合ったものと、我ながら人

の運命に、今でも驚いている。

(二) 翌九日は、ソ連機の爆音で目を覚まされた。最初は雷かと思つたくらいソ連の侵攻には半信半疑であった。綏陽市街を爆撃と機銃掃射の繰り返しをみて、これは本物だと気付いた。

確かにその頃は、南方一線、東京二線、満州三線などと言われ、日ソ不可侵条約の存在から、気楽に過ごしていた、私もその一人である。

(三) 午後二時ごろ、県公署へ呼ばれていた。浅利栄次郎県事務長から、毛布と手まわり品をもって県公署に集合の電話をうけ、満系職員三人を連れて向かったが、皆が出発したあとであった。

ちょうどその時、一二四師団の主力が穆稜へ向け撤退中で、その部隊の後尾について歩き始めた。満系職員三人はいずこかへ去り、私一人であった。

(四) 綏西に着いたときは既に日は暮れ、兵舎や駅舎が紅蓮の炎をあげ、山の中の至るところに焼夷弾が落下、メラメラ燃えている。まるで鬼火のようだ。

道路上には、家財、被服、鉄帽、背囊、防毒面等、

遺棄していったものが散乱し、砲弾の炸裂音や兵の怒号が重なり合つて、さながら地獄絵を呈していた。三道河子山中で一泊。

(五) 十日、朝から暑い、歩く、途中軍馬が乗鞍を付けたまま放棄され、のどかに草を食んでいた。昨日のことは夢のような感じ、山中を歩き続けているうちに、先行の人達に追いつけた。日本人だけでなく、満人、鮮系の人達もあり、数百人の人達が牡丹江目指していたが私はその組織の中に入らず、一人ぼっちであった。(六) 十一日十時、穆稜近くで広い道路に出た。大佐の襟章を付けた将校が、全員を集め、「只今から道路上を行進するが、ソ連の機甲師団が綏芬河より越境、進撃中であるので後方に注意して進め」と指示されたが、間もなく戦車に追いつかれた。

日本軍は、そのソ連戦車隊に攻撃をしかけたため、山中で双方激しい撃ち合いとなり、私もその渦に巻き込まれて生きた心地もなく、恐怖の一日をすごす。

(七) 十二日、朝から雨が降っていた。師団の将兵が陣地へ入るので私は別行動、一人で牡丹江方面に向う。

歩き続けて夕刻。雨はあがつたが寝る場所を探してゆくうち、ふと前方に、大熊がこちらを真正面に座っているのに出会った。周囲には誰もいない。私は立ち竦んでしまった。腹は減る。日は暮れ果てて雨暗し、という歌詞そのものである。神の恵みか、熊は静かに立ちあがり茂みの中に消えていった。

(八) 歩き続けて数日経って、東京城に入った。ここで牡丹江市の小松氏と会い、終戦を知った、確か、十八日だった。その時、停戦という字句で知らされた。そのため小松氏が停戦であるから、ソ連軍は、ソ連国に引き揚げるであろう。また元の満州国に戻るのではないかと、言うことで、今考えれば、実におめでたい判断であった。盲蛇に怖じず、牡丹江市へ戻った。そして小松氏親友の満人を柴河に訪ね、町はずれの軒家を与えられて一時ここに落ち着き逃避行の疲れを癒しながら、的確な情報を満人から聞くことが出来た。

日本無条件降伏、満州国崩かい、関東軍全員武装解除俘虜、日本人は帰国とすること等である。

(九) 柴河で半年程すごしたが、その頃、日本人が満

人から迫害をうけながら彷徨しているのを見ては、私は家にひき入れ、食べ物や衣類をあげて助け合い、安全な所へ案内の世話に奔走していた。

私達も、新京へ向かつて出発し、先ず牡丹江に入る。九月一日ごろだった。

(十) 牡丹江市に入つて、早速、協和会省本部を訪ねたが、暴動等で荒れ果てて、窓ガラスは全部毀され、書類が散乱、金目のものは総て持ち去られていた。日本人の家庭や一般企業等もすべて同じで、気の早い満人は、ここぞと思う家に居座っているのが見られ、満州国崩壊の感を、まざまざと肌感じた。

牡丹江駅へ行くと、丁度ハルピン行きの貨車が出るころなので、飛び乗り、ハルピンからは、線路沿いに新京へ向かつて歩いた。

幾多、危険を冒して新京に着き、協和会の官舎を訪ね、玄関を叩いた。中から声はなく、困っていたころ、私の方を凝視していた人、私は高橋勝治だ、と言って、残務処理をしている家へ連れてゆかれ、給料を渡され、東満の疎開先で会った菅忠行氏の家へ案内さ

れた。

地獄で佛にめぐりあつた如くである。

高橋勝治氏に咎められたときは、塵にまみれ、髭や頭髮はのび放題、怪しげな物乞いに見えたのである。

とまれ、協和会の官舎の人達からは、「今百合若」と言われ、話の種になったのを知つたのは後日のこと。

東満の人達に、四十日ぶりで逢うことができ、やつと人心地がついた。

なお、綏陽警察隊の宍戸氏(岩手水沢出身)が撤退中、山の中で浅利事務長に逢つた。足が痛いというので、揉んであげたら、よくなり、歩けるからと言うので、そのまま別れたという。

閑話休題、その後、東満の人達と奉天に移り、帰国までここで過した。

奉天滞在中は松田一人氏、重野仁志氏、結城吉之助氏等の先輩に世話になりながら、混乱期を過した。

憂きことと思うときぞ恋しきかも、知れないが、前者二人は既に故人となられたが、結城氏は今も健在で活躍しておられるのは私として嬉しい限りである。結

城氏は、親分はだの人、奥地から避難してきた人達を、自分もその中の一人でありながら、笑顔で迎え、よく面倒をみておられた、そういう私も結城氏の世話で、ダンスホールに勤め、楽しく過したことは忘れられない。

(十二) 私は二十一年十一月、帰国したが、あれから早や四十七年目の終戦記念日を迎えようとしている。

引揚げ後、農林水産省に勤務、定年退職後、水戸市農協役員として、第二の職場にいるが、やはり平和とこの頃である。

コンクリートのベット

栃木県 岡村 善四郎

昨夜もろくに眠れなかった。寒さのせいばかりではない。昨日、ソ連の裁判官に言われたことを、何と説明したらいいのか。

「アナタミカドチュセツアルネウソダメホントハナ

シナサイ」通訳の説明によると、誰の著書か、天皇に關する著書で、御門と題する本があり、ソ連軍ではこの本に基づいて天皇と国民の特質的關係を解明しようとして調査研究しているとのことだった。その御門である。どう陳述しよう。敦化県城内の元日本軍部隊の建造物を改造したいかめしい仮獄舎に閉じ込められていた。

この仮獄舎から少し離れたところに、ソ連吉林方面軍の仮軍事法廷が敦化に設けられてあった。

法廷では毎回、必ず訊問書を確認させられ、間違はありません、とサインをすることになっていた。昨日サインの折、月日に気付いて驚いた。ここに移されてから五十日近くになっているのである。十一月の北滿は寒い、大地はすでにカリカリ凍りついているのだ。

この仮牢に移された時は薄暗く、よくわからなかったが、目が慣れて見えるようになった。窓はすべて重に厚壁で隙間もなく、外は一切のぞけなかった。私は左隅に腰をおろし、ぐったりしてしまった。次から次へ不安がつのり、先が思いやられて情けなかった。